

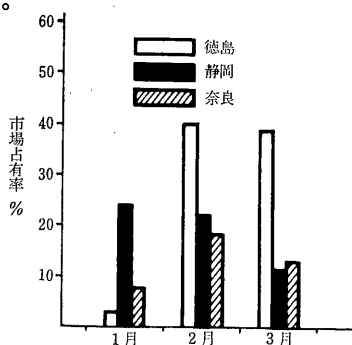
## 徳島県のイチゴ栽培

徳島県農業試験場園芸科長

### 阿 部 泰 典

最近のイチゴ栽培は各地で早出し競争が行なわれており、株冷蔵、電灯照明、ホルモン剤の利用などによって、各地でいろいろな栽培体系がとられている。

徳島県も第1図のように、大阪中央市場における早出し産地として、重要な地位を占めているが、芳玉という独特の品種を用い、このような特殊な操作を必要としない栽培であり、他県からも注目されているので、この技術の概要について紹介したい。



第1図 大阪中央市場における早期出荷の主要産地の市場占有率 (昭和46年)

#### 1. 品種の特性

芳玉は昭和31年、徳島県農業試験場藍住分場園芸試験地で、福羽に代る耐暑性品種（福羽は高温に弱く、西南暖地での育苗は困難である。）として育成されたもので、昭和39年までは県内の需要のみならず、県外出荷は全く行なわれなかった。

40年、はじめて大阪市場に出荷されたが、鮮やかな光沢、形質、風味など、他県産の早出し品種と比較して抜群であったことから注目され、徳島イチゴとして好評を博すようになった。

また、イチゴを早出しするばあい、花芽分化後の早期保温開始（ビニール被覆）が必要であるが、保温をはじめするためには、一定量の低温にあたって休眠がさめていなくては、「わい化」して正常

な発育が行なわれない。

この低温は5°Cが一応基準となり、それぞれの品種によって、5°C以下何時間で休眠がさめるという基準があり、早生の品種ほど、これらの低温経過時間が短かく、晩生の品種ほど長時間経過しなくてはならない。

芳玉は5°C以下の低温に50~80時間、宝交早生は450時間、ダナーでは500~600時間で休眠がさめるため、芳玉はダナー、宝交早生などに比して短かく、それだけ早期被覆による早出しが可能なのである。

しかし、最近では、すでに述べたように、宝交早生、ダナーなども低温処理による休眠打破や、休眠に入るのを防ぐため、ジベレリン処理や電灯照明によって、1~3月収穫が行なわれるようになったが、芳玉は、「はるのか」などとともに、このような処理によらなくても1~3月出しが可能なのが、この品種の大きな特徴である。

#### 2. 育苗

最近までイチゴは、比較的小苗の方が奇形果の発生が少なく、良苗といわれてきた。

しかし、後述のように、奇形果の発生がほぼ完全に防止されるようになった現今では、大苗の方が大果が収穫されるし、生産力が高いため、かなりの大苗が使用されるようになってきた。

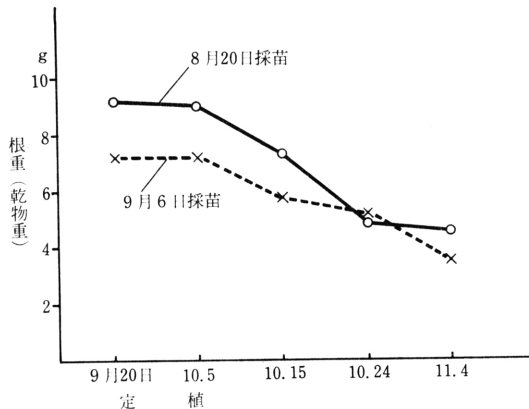
大苗とは老化苗ということではなく、若わかし大苗ということである。8月中旬の採苗で、初期には肥料分を効かせ、9月下旬の定植期には、1株20~30gを目標に育苗する。

このためには、ほ場にもよるが、a当たり窒素分で0.5kgの施肥を必要とする。しかし、後半、花芽分化促進のため、肥料分を切る必要があり、液肥などの施用が望ましい。

#### 3. 定植

イチゴは従来より、花芽分化を確認して定植するのが一般常識となっているが、分化後の定植となると、10月中旬となり、天候などの関係で更におくれるばあいが多し。

ところが、第2図のように定植期がおけると、根量が少なく、とくに早期保温を行なったばあい、おそ植えに、わい化現象がつよく現われることが確認された。



第2図 採苗期、定植期と芳玉の根の生育  
(12月12日調 1969 徳島農試)

すでに述べたように、早期保温開始によるわい化現象が、低温経過不足によるものばかりでなく、定植期がおそく、根の伸張が十分行なわれていないものに、早くから保温をすると、花芽の発育が開始され、生殖生長と栄養生長のバランスがくずれるため、わい化が助長されるのではないかと考えられる。

このため、徳島県では、分化前の9月下旬～10月上旬に定植を行ない、保温開始までに、できるだけ根の伸張を促進するようにつとめているが、このように花芽分化前の定植は、育苗中の「ずらし」を兼ねることになり、花芽の分化促進にもなっている。

#### 4. 施肥

イチゴは野菜類の中でも最も肥やけを起しやすいもので、大きな失敗といえば、元肥による肥料障害であった。このため有機質の油粕、魚粕などが使用されてきたが、最近では緩効性の化成肥料などが使用されるようになった。

とくにCDU化成などは全く安心して使用できる肥料で、徳島県においても、CDU-682の使用が非常に多い。

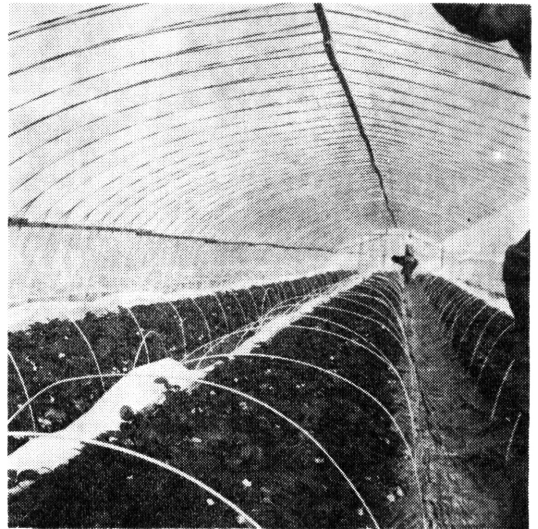
施肥量は収量の増加にともない、しだいに多くなり、県の標準施肥基準は、窒素23、りん酸17、カリ18kgで、その60%を元肥として使用しているが、一般では更に多い。

#### 5. その他の管理

(1) ビニール被覆： 11月下旬がビニール被覆による保温開始期であるが、定植期が10月中旬

以降となると、被覆期をおそくし12月上旬とする。12月中旬以降となると、収穫期がおそくなるばかりでなく、徒長、過繁茂の生育となり、収量はあがらない。

(2) 奇形果の防止： 従来ビニール早出し栽培で最も問題になった点であるが、ハウス内にミツバチの巣箱を設置し、ミツバチによる受粉媒助でほとんど完全に防止できることを確認し、徳島県では大部分利用しており、ミツバチはイチゴのハウス栽培の必需品となっている。



芳玉のハウス栽培 (1月上旬)

しかし極度の低温、高温などによる花器障害に注意し、花器の健全発育をはかっておかななくてはならない。

(3) 摘芽、摘果： 芳玉は側芽の発生が多く、放任すれば、葉数は多くなるが、小葉が密生し、果実も小さくなる。このため第1花房の開花期までは中心芽を1芽とし、以後、側芽を2芽とし、草勢によって各芽8～10果に制限する。

#### 6. 収穫

11月下旬の保温開始で、1月下旬から収穫はじめとなり、5月下旬まで連続収穫が可能である。

4月上旬までに300g入、8,000箱が10a当たりの収量で、大阪市場出荷となる。この時期までに如何に多く収穫するかが、この栽培のポイントである。

その後は県内出荷で、全期を通じて、3.5～4tが平均収量である。